

「最初の状態をよく見て覚えておいてくださいね」。9月上旬、再生医療や創薬などの研究開発を手がける企業・機関が集積する神戸市の人工島ポートアイランドにある実習施設で、富山県内の学生10人が白衣に身を包み、真剣な表情で手を動かしていた。富山の産学官でつくる「くすりのシリコンバレーTOYAMA」創造コンソーシアム（くすりコンソ）によるバイオ医薬品人材育成のための研

バイオ立県道 とやま医薬品産業 5 人材育成(下)

修で的一幕だ。

職員の助言を受けながら、細胞が入った液体を専用の台にセット。液に酸素を供給しながら揺らすことで、細胞を培養する。条件によってどう結果が変わるか細かく検証しながら、実際の現場で行う培養や精製の工程を学ぶ。

この施設は、日本で唯一、バイオ分野の開発や製造、分析に関する実習研修を受けられるバイオロジクス研究・トレ

実習施設は県外頼み



BCRETの実習施設で、細胞培養バッグを専用の台にセットする県内の学生＝9月、神戸市

講座3年間で実績必要

「ニングセンター。通称「BCRET（ビークレット）」だ。国内の深刻なバイオ人材の不足を受け、日本製薬工業協会や日本医療研究開発機構（AMED）、神戸大の支援の下、2017年に設立された。製薬企業社員を中心に、年間30件程度の実習を受け入れている。ニーズは大きく、3年には東京拠点も開設した。

スタートした。社会人向けは延べ28人、学生向けは延べ30人が参加。BCRETの内田和久専務理事は「富山の学生は社会人と比べても遜色ないくらい意欲がある」と太鼓判を押す。

富山では、県立大に県の寄付講座として新設されたバイオ医薬品人材育成講座の講義など、座学のカリキュラムは全国トップレベルに充実している。ただ、BCRETのような、実際に手を動かしながら製造工程を学べる設備はほぼなく、実習や製造現場の見学は県外頼みの状態だ。

付講座は両輪となって、バイオの人材育成を進めている。事業年度はくすりコンソが18年度、寄付講座は25年度。いずれもあと2年余りで一区切りとなる。一方、富士フィルムをはじめ、各社がバイオ事業を加速させる中、製造や品質管理の知識を持つ人材はますます必要になる。

「バイオの現場のニーズに合う人材をどう育て、どの程度の時間や手間がかかるか、実績で示す必要がある」。くすりコンソの森和彦事業責任者は、27年度までをパイロット（試行）期間と位置付ける。富山が人材育成を担う全国の重要拠点として機能し続けるため、「絶対に3年で終わらせてはいけない」と訴える。

持たないのが最大の弱点。誰もが使える設備を継続的に運用できる仕組みや資金が必要だ」と話す。

くすりコンソと県立大の寄



内田氏（右）から実習の説明を受ける学生たち。奥には培養などに使う装置が所狭しと並び

新田八朗知事は24日の記者会見で、くすりコンソなどの期間が終わる28年度以降の方向性について「まだ決定していない」とした上で、「バイオの振興は富山の医薬品産業の高度化や雇用拡大につながる」と意義を強調。「チャンスと捉え、しっかりと結び取りをする必要がある」と語った。